

なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

岡田 航平

1. はじめに

高等学校と大学との関係性を我々はどのように考えるべきなのだろうか。さらに言えば、高等学校から大学へと進学する高校生・大学生の存在を我々はどのように捉えてきたのだろうか。そもそも、高等学校（以下、高校）と大学は、異質な教育機関として制度的に区別されてきた。実際に、学校教育法第 50 条には、「高等学校は、中学における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。」とある。他方、同法第 83 条において、大学は「学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」と記載されている。

異なる教育機能を持つ高校と大学をどのように接続させるのか、という議論が「高大接続」である。この議論では、カリキュラムや教育内容・教育方法など、「教育」に主な焦点が当てられており（荒井, 2005）、実際に過去 30 年間に於いて、教育政策が示され、その実践がなされてきた。その上で荒井（2018）は、「大学は教育と研究の場であり、高校までの学校教育と大学教育とは明らかに違う」と前置きをしてから「教育の実態を見ている限り、さほどの違いを感じることは少ない」と、高校と大学の異質性の議論とは異なる大学教育の現状を指摘している。

本論文の目的は、これまで展開されてきた高校と大学との関係性をめぐる議論に新たな視点を提示することである。本論文では、第一に、高大接続をめぐる議論・政策の展開を整理する。第二に、高校と大学との関係性に関する研究の現状と課題を提示する。第三に、欧米における高等教育への移行研究の変遷を紹介し示唆を得る。その上で、高校と大学との関係性を考えるに際して、高校生や大学生といった「当事者」の視点に立ちその実態を描き出す必要性と、それら当事者視点への理解を促す学術的スタンスとして「現象学」¹の提示を試みるのが本稿である。

2. 高大接続をめぐる議論・政策の展開

2.1. 1990 年代：高校教育と大学教育の関係性の問い直し

日本では、1990 年代から生じた 18 歳人口減少に伴う大学進学率の急激な上昇に伴い、大学を取り巻く環境が大きく変化した。また同時期には、高校教育の多様化と大学入試の多様化・

¹ 本稿はフッサールの現象学を扱う。現象学はハイデガー「存在論」に継承され、メルロ＝ポンティ「身体論」やジャン・ポール・サルトル「実存主義」に影響を与えた（竹田, 1989）。

軽量化が進行した（中村，2010）。高校教育の多様化とは、高校の必修科目の減少や履修歴の多様化であり、大学入試の多様化・軽量化とは、入試の少数科目化や推薦入試や AO 入試など非学力選抜の普及である。その結果、従来機能していた大学入試の選抜機能が低下し（佐々木，2012）、「高校と大学の接続」という制度的視点を考慮した「選抜から教育へ」という論点が浮上した（荒井，1998）。荒井（1997）は、リメディアル教育を通じて大学生が受験勉強の世界に戻ってしまうことを例にあげ、「学生たちが学んだ高校教育と大学教育の乖離」を指摘するなど、1990 年代には、教育機関間の異質性を前提とした上で、その接続が議論されるようになった。

この動向を示したのが中央教育審議会（1999）『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』（以下、『接続答申』と表記）である。勝野（2004）によると『接続答申』は、教育改革が進み生徒・学生の能力・適性が変化の中で、改めて各学校種の目的や役割を明確にしたものであった。また、選抜機能の低下が顕著な大学入試の問題を接続重視の観点から捉え直すと同時に、学校種間（高校と大学）、及び学校と社会の接続の改善に着目し、職業生活までを見通した一連の円滑な移行が意識される内容であった。すなわち『接続答申』が示したのは、高校と大学の異なる目的・役割を再確認しながらも、カリキュラムや教育内容・教育方法といった「教育接続」（荒井，2005）に焦点を当てて、高大接続を目指す方向性であった（田中，2022）。

2.2. 2000 年代：初年次教育とキャリア教育の普及

2000 年前後には、学習目的・学習動機・学習習慣など「学生の多様化」が顕著になり（山田，2011）、各大学は、学力や学習意欲が低下した学生に対する初年次教育や補習教育（濱名・川嶋，2006）を展開するようになった。初年次教育は、初年次の充実が大学生活への転換を促進し退学率低下をもたらすと米国で実施・評価されてきた（山田，2008）。この初年次教育の発想が、高校教育と大学教育の接続を支援する手段として、日本に採り入れられた。日本における初年次教育は正課教育として扱われることが多く、実際に中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて（答申）』（以下、『学士課程答申』と表記）では、初年次教育は「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と定義され、学習の動機づけや習慣形成に向けて学士課程教育に適切に位置づけられる必要性が明示された。荒井（2011）は、初年次教育や補習教育の教育実践を包括して「高大接続」と呼ばれることが多くなったと言及している。

2000 年代には、若者のフリーター志向や早期離職が社会問題となり（羽石ほか，2008）、大学新卒者採用時に必要な能力水準が高まる中で、大学時代の経験を企業が深く尋ねるようになるなど（岩脇，2007）、「大学での学び」に対する社会的関心が高まることとなった（濱中，2016）。実際に『学士課程答申』では、キャリア教育を教育課程で適切に位置付ける必要性が示され、社会との接続を意図した学生のキャリアの形成・開発の一助が大学に期待された（望月，2007）。さらに、中央教育審議会（2011）『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』では、「後期中等教育修了までにおけるキャリア教育の目標である多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成と、これらの育成を通じた勤労観・職業観等の価値観の自らの形成・確立を基礎」として、高等教育におけるキャリア教育の必要性が記された。

このように 2000 年代の高大接続は「初年次教育」や「キャリア教育」などの学生支援を名目とする特定のディシプリンを持たない教育活動（吉田，2020）に焦点化され検討されてきた。

岡田：なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

2.3. 2010 年代：高大接続改革の中心としての大学入学者選抜への注目

2010 年代初頭より、高大接続は「大学入学者選抜」の改革を中心に論じられた（日本学術会議，2023）。最たる例が、中央教育審議会（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』（以下、『高大接続答申』と表記）である。『高大接続答申』は、初等中等教育から高等教育を通じて養うべき能力の発展を阻害するボトルネックである「大学入学者選抜」の改革を通じて高大接続を目指すものであった（大谷，2020）。『高大接続答申』では、「学力の三要素」を提示の上、高校教育と大学のアドミッション・ポリシーも含めた「初等中等教育から高等教育まで一貫した、これからの時代に求められる力の育成」が掲げられたが（松下，2016）、高校と大学双方の改革への内発的動機づけが高まらない中で改革を試み、かつその社会実装のプランとプロセスが乱暴だったこともあり（大谷，2020）、大学入学者選抜改革の目玉事項は全て頓挫することになった。

2.4. 2020 年代：探究学習と入学前教育がもたらす高大接続の制度的達成

そして近年着目されているのが、大学教育の先取り機能を担う探究学習と入学前教育である。

高校教育の探究学習の中心である「総合的な探究の時間」は、「総合的な学習の時間」が改定され 2022 年度から新設された科目であり、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行う」ことが目指されている（文部科学省，2023）。探究学習で培った力は大学入学後の学習で発展・向上することが期待されており（西ほか，2023）、探究の名を冠した科目も複数新設されるなど、探究学習が、高校教育と大学教育の直接的な接続を担っているといえよう。

早期合格の高校生を対象に、大学入学以前に各大学によって実施されているのが入学前教育である。入学前教育は、1990 年代末に理系の補習教育として始まり、近年は学習習慣の維持や学力の維持・向上、専門教育の導入や生活面の不安解消を目的に、多様な実践がなされている（山本ほか，2024）。文部科学省（2018）は、総合型選抜の約 7 割、学校推薦型選抜の 8 割超の合格者への入学前教育の実施率を評価した上で、早期合格後の学習意欲の維持に向けた入学前教育の実質化を求めている。2020 年度より『大学入学者選抜実施要項』には、各大学が「入学後の学修のための準備をあらかじめ講ずるよう努める」と追記されており（文部科学省，2020）、今後も入学前教育の重要性が増すことが想定されている（溝口ほか，2022）。

2.5. 議論・政策の到達点と限界

これらの展開をまとめると図 1 のようになる。すなわち 1990 年代から始まった「教育接続」

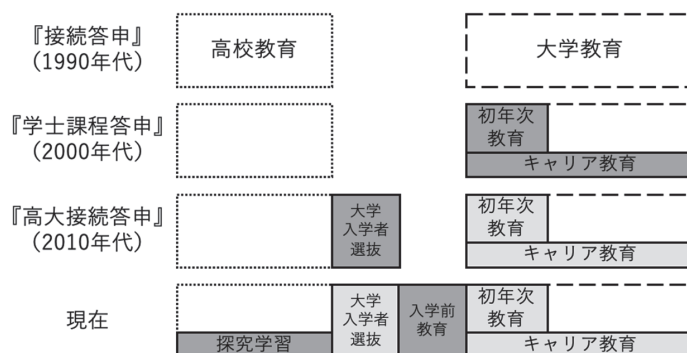


図 1 高大接続をめぐる議論・政策の焦点の展開

としての高大接続は、当初は大学教育全体、2000年代は初年次教育やキャリア教育、2010年代には改めて大学入学者選抜を中心に焦点化して論じられてきた。そして近年は探究学習と入学前教育に焦点が当てられている。このように高大接続をめぐる議論や政策は、社会の変化に呼応する形で時間の経過とともに徐々に姿を変えてきた（濱中，2016）。その結果として、現在、制度的には高大接続が間断なく可能になったとみることができよう。

それでは、この高大接続という枠組みのもとを生きる「学生」はどのような様子をみせているのだろうか。というのも、高大接続の議論・政策はあくまで改革という手段に過ぎない。吉田（2008）の言葉を借りれば「教育に力を入れた結果、教育の対象である学生が学力を伸ばしたか、諸能力を涵養したかなどの変化が生じることが改革の成果」であり、「手段がどこまで準備されたかとともに、その手段が最終目的に有効に機能したか」を捉える必要がある。換言すれば、高校と大学の関係性を検討するためには、制度的に高校と大学の接続が達成された中で、どのように高校生や大学生が高大接続を経験しているのか、に着目することが求められる。

3. 高校と大学の関係性に関する研究の現状と課題

3.1. 「学生」に焦点を当てた研究の不足

高校と大学の関係性を考える上で、そもそも大学生はどのように論じられてきたのだろうか。バブル経済期を頂点に1980年代から1990年代初頭にかけて、大学生は、「レジャーランド」と揶揄されてきた大学に所属しており（片桐，2014）、学業に力を注ぐことなく、アルバイトや遊びに明け暮れる存在として描かれた（新立，2010）。しかし、高大接続の議論が本格化した1990年代より、大学生は社会と共生し始めることとなった。実際に溝上（2002）は、大学入学以前の期待と大学入学後の失望への変容に伴って自分を見失う大学生や、勉強をする意味がわからないが故に勉強の気力が湧かない大学生の特徴を描きだし、その上で、就職前の最後の自由な期間である大学生の期間を充実させなければいけないという認識から生じる「ユニバーシティ・ブルー（大学生の憂うつ）」を示唆した。その後、高校と大学の「接合」が重視され、初年次教育が普及した結果、大学生は高校生に近い存在になった（武内，2014）。その上で、大多和（2019）は、大学進学率の増加や学力の多様化、高校での学びの複線化に起因して、「現代の大学生」が多様・複雑化していることから、一括りで大学生を論ずることが困難になったと指摘する。

1990年頃より、日本の大学では政策主導による「教育」改革に力を入れてきたが、これまで高等教育研究では大学教育を受ける「学生」が正面きって扱われてこなかった（吉田，2008）。すなわち、論じることが難化傾向にある学生の実態を十分に捉えることなく、大学教育改革が、言い換えれば、高大接続が推進されてきたのである。この問題は、高大接続や入試改革をめぐる議論の狙いが概念の整理や政策の問題点の抽出にあり、その議論の前提である高校生の実態が十分に吟味されてこなかったとの指摘とも重なる（山村・濱中，2019）。これらを踏まえれば、従来の研究について、高校生や大学生が十分に着目されることなく、高大接続の枠組みやその実践、そして、高校と大学の関係性が議論されてきたという限界を指摘することができる。

3.2. 高校と大学の連続性に考慮した研究の不足

これまで展開されてきた大学研究と高校研究では、一方では重視されている研究が、他方ではあまり研究対象とされないなど、両者間の溝が存在している（大多和，2019）。それでは、高

岡田：なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

校と大学の連続性を考慮した先行研究はどれほど蓄積されてきたのだろうか。

最も大きな研究は溝上・河合塾による「学校と社会をつなぐ調査」である。本研究は 45,000 人超の高校 2 年生への大規模調査から始まり、最終的には計 1,486 名の調査対象者を 10 年間、社会人になるまで追う調査であった。その結果、高校 2 年生と社会人 3 年目の資質・能力を比較した場合、相対的な安定性が示されており（あまり変化はなく）、高校時代の資質・能力の発展が十分でない場合には、大学生・社会人になってもその資質・能力を十分に発展させられない可能性が高いことが指摘された（溝上・河合塾, 2023）。本調査は、高校 2 年、大学 1・3・4 年、社会人 3 年目の 5 時点で調査している意味では縦断的ではあるものの、各調査の間隔が年単位で空いており、高校生・大学生の実態やその経験が絶え間なくみられてきたとはいえない。加えて、兼松（2007）は高校から大学への移行過程を、高校生活・大学入試・大学生活という 3 区分を設けて分析しているが、ここでは大学合格から大学入学の経験が見落とされている。また、高大接続の学力に関する議論では、関連研究は量的研究が主であり、その学力の形成過程や形成環境が示されていないとの課題から、質的研究の必要性が指摘されている（大谷, 2020）。

このように、高校と大学を縦断的に扱った研究は少なからず展開されてきたものの、高大接続という枠組みにおける絶え間なき連続性を考慮した研究はそれほど多くない。吉田（2008）の指摘に戻れば、高大接続という改革・手段を踏まえて、「学生」に焦点を当てながら、その目的に翻り、高校と大学の関係性や、その連続性を検討することは十分になされていない。

4. 欧米における高等教育への移行研究の変遷とその示唆

これまで日本の高大接続の議論・政策を概観し、高校と大学の関係性に関する研究の現状と課題に触れた。これら日本固有の議論・政策や研究を、国際的な研究動向に照らした場合、それは「高等教育への移行研究（Transition into Higher Education）」といった文脈で論じられる。それでは、欧米における高等教育への移行研究はどのような議論の変遷を経てきたのだろうか。そしてその変遷は、日本の文脈を検討する上で、どのような示唆を与えるのだろうか。

4.1. 高等教育への移行研究の淵源

「移行（Transition）」という概念は、現代社会における生活の基盤となる特徴であり、現代の社会理論の中心に位置づいている（Field et al., 2009）。移行とは、仕事や人間関係をはじめとした生活のあらゆる場面に当てはめられる概念であり、高等教育への入学・適応という文脈でも広く論じられてきた。しかしながら、移行という概念への注目が絶えず続いている一方で、移行について合意された定義はない（Ecclestone et al., 2010）。

「高等教育への移行」という考え方は、1960 年代から 70 年代の欧米における学生人口の変化と急速な高等教育の大衆化、いわゆる大学のマス化（Trow, 1973）の過程で着目されてきた。この過程では、大学進学が特権階級に限定されず、より多くの若者の手の届く選択肢となり、その結果、学生の高等教育への適応が問題視されてきた。実際に、初年次を扱う実証的研究は、1960 年代後半より「学生時代に大学生がいかに学習し成長していくかという発達の過程と、初年次生の成功を促進するような大学の環境」に焦点化し、本格的に実施されてきた（山田, 2008）。

これら大学生の移行・適応研究、とりわけ発達研究に大きな影響を与えたのがアイデンティティ理論である（山田, 2008）。Erikson（1968）は青年期における自己アイデンティティの確立

の重要性に言及し、単に個人的な問題ではなく、社会的・心理的な統合が個人の成長やアイデンティティ形成には不可欠だと指摘した。この Erikson の理論を高等教育への移行という具体的場面に落とし込み、中途退学を例に「学業的統合」「社会的統合」の重要性を示したのが Tinto である。Tinto (1987) は、学生が大学生活に適応し成長する過程を詳細に分析し、退学が単なる個人的な選択ではなく、教育機関やその環境の大きな影響を受けた結果であると論じた。これら議論に基づき、同時期に、大学や教育機関が学生の成長や学習成果にどのような影響を与えているのかを体系的に分析したのが Astin である。Astin (1985) の IEO モデルでは、既得情報 (Input)、環境 (Environment)、成果 (Outcomes) が設定され、「①学生の学習や発達は学生自身の関与の量と質に比例する、②教育政策、教育実践、教員の学生への関与は学生を関与に導き、成果へつながる」という関与理論を提唱した。「ティントは退学を選択した学生の退学に至るまでの過程に焦点をあて、アスティンの関与理論を発展させて、学問上および社会上の経験を統合する過程を通じて学生が目標へと向かう過程」を明らかにしたのである (山田, 2008)。

実際に、学生の大学への移行に関する国際的な研究は、総じて学生の社会的・学問的状況と、学生を支援すべき制度との相互関係を強調しており、近年においても多くの研究で、初年次の学生の成功に関する Tinto (1987) の研究がいまだに引用されている (Briggs et al., 2012)。このように高等教育への移行研究は、傾向として教育的側面と社会的側面に、言い換えれば、教育の枠組みと教育以外の枠組みの双方に意図的に重きを置く研究である。

4.2. 移行の解釈の変化

このような移行の考え方が主流である一方、移行の解釈への変化が生じている。そこで本稿では、移行の解釈の変化を3つに区分し示した Gale & Parker (2014) の議論を参照する。彼らによれば、高等教育への移行に関しては、導入 (Induction) としての移行、発展 (Development) としての移行、生成 (Becoming) としての移行、という3つの立場から移行が論じられており、それをまとめると表1のようになるという。

表1 高等教育への学生の移行の類型 (Gale & Parker (2014) を一部修正し筆者が作成)

学生の移行の概念	移行のメタファー	移行の変化の種類 〇から〇への変化	移行のダイナミクス	例示的な移行活動/強調点/システム
導入としての移行 (T1)	道筋/旅/ マイルストーン	・教え込み(順次定義された調整期間) ・ある期間・分野の文脈から他へ	・直線的/時系列的/前進的 ・比較的固定された構造とシステム ・文化的ショックとしての危機	・オリエンテーション ・手続きやカリキュラム内容など「その場その場」の手続き ・初年次セミナー ・制度主義的な移行教育 (Kift, 2009)
発展としての移行 (T2)	軌道/ライフ ステージ	・変容(成熟の質的に異なる段階) ・学生としてのアイデンティティやキャリア・アイデンティティから他へ	・直線的/累積的/不可逆的 ・明確で単一の連続的なアイデンティティ ・批判的な出来事としての危機(アイデンティティ形成)	・メンタリングプログラム ・キャリアと研究文化の発展活動/強調 ・成功した学生と職員による学生とキャリア軌道の支援 ・個別主義的な移行教育
生成としての移行 (T3)	人生全体/ リゾーム的	・変動(断片的動きの連続的まとめ) ・誕生から死までの生きられた現実や主観的経験	・リゾーム的/ジグザク/螺旋運動 ・柔軟なシステム/ 流動的で(儚い)アイデンティティ ・どちらの時期でもない危機	・柔軟な学習モード ・再入学などを含む柔軟な学生の学習経路 ・周縁化された学生の歴史や主観性を反映・支持するカリキュラム ・結びつきを前提とした移行教育 (Hockingsほか, 2010)

導入としての移行とは、順次定義された調整期間を含み、ある期間や分野の文脈から他のものへと移行する際の習慣の道筋を経るものである。これは直線的で時系列的かつ前進的な考えである。入学時における学生と高等教育との出会いが重視されており、大学入学以前の経験に

岡田：なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

重きは置かれていない。この移行の解釈では、Tinto の議論を援用し初年次学生の移行に対する組織の対応や配慮を正当化している。学生の移行は他者によって規定されており (Quinn, 2010)、彼ら自身が自らの移行をナビゲートすることは想定されていない。

次に発展としての移行とは、質的に異なる成熟の段階を含み、ある学生やキャリアのアイデンティティから他のものへと移行する際の変革の軌道を経るものである。これは直線的で累積的かつ不可逆的な考え方である。2000 年頃より、青年期や成人期を取り巻く環境の変化に伴う個人の選択機会の増加を理由に、直線的で一元的な移行の解釈を否定し、移行の道筋の個人化が顕著だと認識が広がり (Evans, 2002)、特に高等教育への移行研究では、移行とは多様かつ流動的であり、直線的ではないとの見方が主流となった (Gale & Parker, 2014)。この解釈に立つ学生の変容や発達といった移行では、一元的な移行は想定されておらず、アイデンティティ研究がここに位置づくように移行をナビゲートする学生の姿が想定されているものの、しかしながら、全体像を捉えれば、ある地点からある地点への移行という道筋が想定されている。

他方、これらの移行とは大きく異なる解釈が生成としての移行である。それは、生涯にわたる生きられた現実や主観的経験の変動を伴う断片的な動きの連続的なまとまりで、誕生から死までの変動を含んでおり、リゾーム的、ジグザグとした、螺旋運動の移行の姿が想定されている。この解釈は、高等教育への移行を、①特定の危機の時期、②直線的な進行の一部、③普遍的に経験され常態化されたもの、と捉える上記 2 つの移行の解釈に異議を唱えて (Gale & Parker, 2014)、人々が自分自身の首尾一貫した物語を生み出すことができる (アイデンティティが存在する) という仮定にも疑問を呈する (Eclestone, 2009)。この立場では解釈への批判に留まらず、高等教育へ移行する際に困難や葛藤に直面する脆弱な存在だと仮定された学生に対する大学の組織的支援のあり方をも批判している (Gravett, 2021)。

4.3. 高等教育への移行研究がもたらす示唆

このように高等教育への移行研究における移行の解釈は変化をみせてきた。しかしながら、これらの変化が実際の研究に昇華されているわけではない。Noyens et al. (2017) は、高等教育初年次への移行研究を分析した結果、これまでの研究の大部分は、①初年次のみを対象に、②単一時点から、③性別などの特性やモチベーション、コンピテンシーに基づき調査を実施し、④量的なデータを研究成果として扱っているとの限界性を指摘しており、その上で、①初年次以前も踏まえた上で、②異なった移行段階を考慮して複数の時点から、③科目での経験や学びの環境の側面なども考慮して調査を実施し、④学生の経験や、主観的な学習成果の変数といった質的なデータを研究成果として扱うことの必要性を主張している。さらに Field (2010) は、移行を検討する上では、個人の移行経験の主体性への着目が重視されてきた一方で、その移行が生じる組織的・制度的な環境をも含めた双方向からのアプローチの必要性を指摘している。

このように高等教育への移行研究では、移行が孕む前提条件やその解釈が変化してきたことがわかる。他方、それらが実際の実践と紐付きながら実証研究として十分に検討されてきたかというところではない。それでは、これら欧米の高等教育への移行研究は、日本における高校と大学の関係性に関する議論や研究に何を示唆しうるのか。それは、教育制度や教育活動に着目してきた高大接続の議論の蓄積を評価する一方、日本の議論で欠落してきた社会的側面をも含めた高校生や大学生の実態に着目する必要性を求めるものである。さらにいえば「高校から

大学への移行に際して困難を伴う学生の存在」及び「異質性を前提とした高校と大学の関係性」に批判的な視座を持つべきではないか、という示唆だといえよう。

5. なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか

5.1 当事者視点をもたらす必要性

それでは、学生の存在、及び高校と大学の関係性に批判的視座を持つべきとの示唆が仮に成立する場合、我々は何を考えるべきなのだろうか。本稿では「当事者視点」がもたらす必要性を論じる。そもそも教育を提供する側（行政や高校・大学）と教育を享受する側（高校生・大学生）の2側面から教育接続を検討する必要性は20年近く前から指摘されてきた（吉田, 2011）。実際に杉谷（2004）は、高大接続において「カリキュラムサイドの問題だけではなく、学生が情緒的な側面も含めて、いかに成長発達を遂げ、自らにとっての学びの意味を見出していか、高校から大学、大学から職業（あるいは大学院）への移行とは、そもそも現代の学生においてどのような変化であるのか、そうした基礎的な研究を行うことがますます必要となってくるであろう」と明確に指摘している。しかしながら、そのような研究蓄積はいまだに十分ではない。

さらに吉田（2008）は、大学生を研究対象とする有用性に関して、大きく3点を論じている。それは、①大学生という社会的立場は大学在学中に限るものであり、大学という場なくして大学生は存在しないが故に、大学生たらしめている大学という環境を大学生の分析の視点に組み込むことの重要性、②他方、学生の意識・行動と大学構造との関連性の検討は、時代や地域を超えた共通性を見出すという可能性、③そして、学生に対する大学教育の影響力の実証研究に基づき、大学がどの程度学生に関与可能かという研究を積み重ねることの必要性、である。

しかし、本稿で扱った議論に鑑みれば、この主張に対して以下の指摘が可能である。第一に、大学という環境を考慮するのであれば、高大接続といった「教育」への過度な焦点化は避けるべきである。第二に、ここで語られているのは、あくまで「研究対象として取り扱われる」大学生への着目であり、高大接続のもとを生きる「当事者視点」に立つ有用性は語られていない。第三に、過去30年の大学を取り巻く変化に伴い暗黙的に想定されてきた高大接続の前提が揺らいでいる懸念を考慮すると、当事者視点で「高大接続」という枠組み・手段を検証しなければ、高大接続や高校と大学の関係性の議論、及びその実態を批判的に検討することはできない。

荒井（1998）は「大学進学者がさらに増え、様々な年齢層から大学へ進学するものが増えていけば、やがて高校と大学の接続という枠組み自体も無意味化する時代がやってこよう」との懸念を示した。高大接続はあくまで手段に過ぎないことを自覚し、当事者視点や彼らの経験・現実に目を向けなければ、これまでの議論や政策の過程が本末転倒になりかねないのである。

当事者視点の欠如という問題は高大接続に限るものではない。荻谷（2018）は日本の高等教育が「演繹型の政策思考」と疑義を呈する。その思考とは、未来の状況に関する理念や理想を前提とした逆算で教育の目標を演繹的に導き出す思考習性である。その上で荻谷は、個別具体的な事例の質的調査を積み重ねることで、そこから帰納的に教育実践の効用を抽出できる可能性を提案する。高大接続の議論においても同様に、高校生や大学生の視点を十分に考慮することなく具体性に欠けた問題意識に基づいて議論や政策が展開されてきた懸念を踏まえ、今後は当事者の視点に基づく帰納的な検討の積み重ねが求められる。荻谷（2018）の言葉を借りれば、

各大学が目下に存在する実態（高大接続）に着目し、高校生や大学生の経験に基づいた当事者視点から、高校と大学の関係性の「帰納的な見直し」を図ることが必要だといえよう。

5.2. 当事者視点への理解を促す学術的スタンスとしての「現象学」

当事者視点で検討を進める拠り所となりうるのが「現象学」という学術的スタンスである。現象学とは、20世紀初頭にドイツ人哲学者 Husserl が提唱した考え方であり、端的に言えば、主観という「当事者」視点から事象を理解する立場である。竹田（2015）によれば、現象学は、客体の存在を否定し、主観のうちに構成される認識の共通の構造と条件を取りだす（本質観取）。その共通の構造や条件自体が本質であり、万人の納得とも換言される。現象学の本質の問いには、客観的答えや真理は存在しないが「正当性を持つ合意」は取り出せる可能性があるという。

西（2015）は、教育学研究を含む「現象学的な人間科学研究」の現象学が意味する点として、①当事者の「体験」を自然科学や社会科学のように外側から説明するのではなく「当事者がそれをどのように経験しているのかを内側から考察しようとする」、②その体験から構造や本質と呼ばれる「一般性」を取り出そうとする、の2点を挙げる。質的研究が目指す一般性とは、文化的・時代的背景や境遇、立場を前提とした限定の中にある一般性（限定的一般性）を意味する（山竹，2015）。これらに鑑みれば、現象学こそが当事者視点への理解を促すことがわかる。

現象学の立場から高校と大学の関係性を問う際には、オランダ人教育学者 Van Manen の議論が参考となる。Van Manen は、教えること、親であること、教育することを含む「子どもとともに生きること一般」を教育（pedagogy）と解釈し、それは子どもの人格的成長を援助しようとする大人全てに該当すると主張した（村井，2000）。教育では絶えず実践的に行為することが求められる一方で、教育学研究の抽象化傾向と子どもと生きる生活世界や実践との間の乖離を指摘した Van Manen（1990）は、「生きられた経験」（子どものリアリティと生活世界）に迫る重要性を言及した。彼の言葉を借りれば、現象学は「学びの経験の本性や本質とはいかなるものか」を問い、個別の学びの経験が子どもにとってどのような意味・意義があるのかに迫る。

従来の高校と大学の関係性における議論では、高大接続が「教育」に焦点化されてきた通り、リアルな高校生・大学生（当事者）の姿やその経験が検討に組み込まれてこなかった。そこで、高校と大学の関係性を問い直すには、「高大接続を含む高校から大学への経験が、高校生や大学生にとってどのように意味づけ・意義づけされているのか」という新たな視点が必要となる。一例として、①高校生であること、②大学生になること、③大学生であること、を純粋に問い、その本質観取を試みれば、大学生になっていく当事者のリアリティへの理解が可能になる。

ここで注意すべきは、「現象学」を掲げる研究は当事者の視点や個人の経験に迫るため、ときに多様性の議論に収斂してしまう懸念である。他方、研究者自身が、選択した人間の特質に自分の関心を定位することによって、真に現象学的に問うことは可能になる（Van Manen, 1990）。すなわち、真に現象学的な当事者視点に迫る研究を行うのであれば、聴き手が自分の感じたこと、自分の意識に生じたことに注意を向け、自らの主観に生じたことを内省するプロセスを記述する必要がある（岩崎，2016）。しかしながら、現象学に依拠した先行研究において、研究者の主観における意味の直感・変容を重視したものはほとんどみられない（山竹，2015）。読者の「腑に落ちる」（確かに読者にも思い当たる）感覚を、論文を書くという営みを通して、どのように生成できるのか、という難題への挑戦が現象学というスタンスには求められる。

そこで最後に、現象学の学術的スタンスに拠る研究として、筆者は以下の手法を提案する。まずは半構造化インタビュー実施し、高校と大学の関係性を検討するために、高校生であること、大学生になること、大学生であることの3点を、調査対象者である高校生・大学生に問う。そこで得られた語りを踏まえて、研究者は、調査対象者である当事者の視点（主観）に立つて各問いの調査対象者の解釈を要約し、一人称で明文化する。そして、明記された解釈内容を調査対象者に開示し、確認・検討することで両者の共通理解を構築する。これらの過程を複数の調査対象者に対しても同様に実施し、大学生へとなっていく経験の意味・意義を本質観取する。いわば研究者が、調査対象者の認識する「高校生としての私」「大学生としての私」をともに追体験し、彼らの主観や生きられた経験を理解することを目指す手法である。

この手法において研究者は、「書く」という営みを通して、各々の主観（当事者視点）に迫り、そこから当該文脈にて浮上する一般的限定性を見出す。ここで得られた他者のエピソードは、研究者の中の「確かに自分にも思い当たる」という「反省的エヴィデンス」に支えられることで、本質観取を成立させるための証拠・材料として機能する（西，2015）。山竹（2015）は、研究者自身が聞いて感じたことを示し自らの内面を開示することが、読者に共通理解をもたらす重要な役割を担うと述べたが、この手法では、研究者自身による調査対象者の主観の解釈、及びその確認・検討の過程を明示することで「確信の根拠」を示し、研究者・調査対象者と読者との間の共通理解を得ることができる。このように、現象学という学術的スタンスのもと、高校生から大学生になる「生きられた経験」を問い、本質観取を試みて、高校生・大学生の当事者視点を理解することで、「高校と大学の関係性」への批判的な検討（問題設定）が可能になる。

6. おわりに

「なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？」という問いに改めて答えるならば、それは高大接続といった改革・手段を検証するとともに、疑いなく前提とされてきた「高校と大学の関係性」や「学生が存在」を新たな視点から問い直すことを可能にする。今日の日本では高校から大学の移行パターンが細かく断片化されており（日本学術会議，2023）、30年間正しいとされてきた高校と大学の関係性の想定が当てはまらないことも考えられよう。教育とは、意味と解釈を通して循環的に機能するものであることを考慮すれば（Biesta, 2020）、当事者の視点から絶えず教育の実態を捉え直すことが、教育の在り方を再考する手段となる。現象学という学術的スタンスに依拠し、本稿で提案した手法を実際に用いながら、高校生・大学生の当事者視点を理解し、彼らの経験の意味・意義に迫り、その上で、「高校と大学の関係性」を帰納的かつ批判的に検討することが、本稿の議論を踏まえた筆者の次のステップとなる。

7. 参考文献

- 荒井克弘 (1997) 「新しい学生層とリメディアル教育」 大学入試センター編著『大学ガイダンス セミナー報告書ー平成8年度ー』 大学入試センター, 26-39.
- 荒井克弘 (1998) 「高校と大学との接続」『高等教育研究』1, 179-197.
- 荒井克弘 (2005) 「入試選抜から教育接続へ」 荒井克弘・橋本昭彦編著『高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ』 玉川大学出版部, 9-16.

岡田：なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

- 荒井克弘 (2011)「高大接続の日本的構造」『高等教育研究』14, 7-21.
- 荒井克弘 (2018)「高大接続改革・再考」『名古屋高等教育研究』18, 5-21.
- Astin, A. W. (1985). *Achieving educational excellence: A critical assessment of priorities and practices in higher education*. Jossey-Bass.
- Biesta, G. (2020). *Educational research: An unorthodox introduction*. Bloomsbury Academic.
- Briggs, A. R. J., Clark, J., & Hall, I. (2012). Building bridges: Understanding student transition to university. *Quality in Higher Education*, 18(1), 3-21.
- 中央教育審議会 (1999)『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm) (2024 年 9 月 2 日)
- 中央教育審議会 (2008)『学士課程教育の構築に向けて(答申)』(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) (2024 年 9 月 2 日)
- 中央教育審議会 (2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf) (2024 年 9 月 2 日)
- 中央教育審議会 (2014)『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)』(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/c_hukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf) (2024 年 9 月 2 日)
- Ecclestone, K. (2009). Lost and found in transition. In J. Field, J. Gallacher, & R. Ingram (Eds.), *Researching transitions in lifelong learning* (9–27). Routledge.
- Ecclestone, K., Biesta, G., & Hughes, M. (2010). *Transitions and learning through the lifecourse*. Routledge.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. W. W. Norton & Company.
- Evans, K. (2002). Taking Control of their Lives? Agency in Young Adult Transitions in England and the New Germany. *Journal of Youth Studies*, 5(3), 245-269.
- Field, J., Gallacher, J., & Ingram, R. (Eds.). (2009). *Researching transitions in lifelong learning*. Routledge.
- Field, J. (2010). Preface. In Ecclestone, K., Biesta, G., & Hughes, M. (Eds.), *Transitions and learning through the lifecourse* (XVIII-XXIV). Routledge.
- Gale, T., & Parker, S. (2014). Navigating change: a typology of student transition in higher education. *Studies in Higher Education*, 39(5), 734-753.
- Gravett, K. (2021). Troubling transitions and celebrating becomings: from pathway to rhizome. *Studies in Higher Education*, 46(8), 1506-1517.
- 濱名篤・川嶋太津夫編 (2006)『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向－』丸善.
- 濱中淳子 (2016)「高大接続改革と教育現場の断層－「善意」の帰結を問う－」『教育学研究』83(4), 29-40.
- 羽石寛寿・安久典宏・西岡久充 (2008)「大学におけるキャリア支援教育の研究」『経営情報研究：摂南大学経営情報学部論集』15(2), 89-108.
- 岩崎久志 (2016)「「生きられた経験」を明らかにする現象学的考察の検討」『流通科学大学論集

- 人間・社会・自然編』29(1), 11-28.
- 岩脇新裕 (2007)「大学新卒者採用における面接評価の構造」『日本労働研究雑誌』49(10), 49-59.
- 兼松儀郎 (2007)『中等教育と高等教育とのアーティキュレーション』学術出版会.
- 荻谷剛彦 (2018)「『大学性悪説』による問題構築という〈問題〉—大学改革における言語技法の分析」佐藤郁哉編著『50年目の「大学解体」20年後の大学再生—高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて』京都大学学術出版会, 47-104.
- 片桐新自 (2014)「現代学生の意識と価値観 25年間の調査から」『生活共同組合研究』456, 5-13.
- 勝野頼彦 (2004)『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』学事出版.
- 松下佳代 (2016)「資質・能力の新たな枠組み—「3・3・1モデル」の提案—」『京都大学高等教育研究』22, 139-149.
- 溝上慎一 (2002)「大学生の憂うつ—ユニバーシティ・ブルー」溝上慎一編著『大学生論—戦後大学生論の系譜を踏まえて—』ナカニシヤ出版.
- 溝上慎一・河合塾編 (2023)『高校・大学・社会 学びと成長のリアル—「学校と社会をつなぐ調査」10年の軌跡』学事出版.
- 溝口侑・斉藤準・木原宏子・松井晋作 (2022)「入学前教育の今後の課題と展開」『大学教育学会誌』44(2), 155-160.
- 望月由紀 (2007)『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪—高校進路指導の社会学』東信堂.
- 文部科学省 (2018)『平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について (通知)』(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1397731_03.pdf) (2024 年 9 月 2 日)
- 文部科学省 (2020)『令和 3 年度大学入学者選抜実施要項』(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/mxt_kouhou02-20200619_1.pdf) (2024 年 9 月 2 日)
- 文部科学省 (2023)『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開』文部科学省.
- 村井尚子 (2000)「ヴァン＝マナーンにおける「生きられた経験」の現象学的探究」『京都大学大学院教育学研究科紀要』46, 348-360.
- 中村高康 (2010)「ユニバーサル化の課題としての「高大接続」」中村高康編著『大学への進学選抜と接続』玉川大学出版部, 286-293.
- 日本学術会議 (2023)『日本における高大接続の課題—「セグメント化」している現状を踏まえて—』(<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-h230926-6.pdf>) (2024 年 9 月 2 日)
- 西研 (2015)「人間科学と本質観取」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』新曜社, 119-186.
- 西健太郎・上野雄己・日高一郎・北村友人 (2023)「中等教育における探究学習が大学での学習にもたらす効果—東大附属中等教育学校の卒業生調査から—」『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要』8, 203-222.
- Noyens, D., Danche, V., Coertjens, L., & Petegem, P, V. (2017). Transitions to Higher Education. In Kyndt, E., Donche, V., Trigwell, K., & Lindblom-Ylänne. (Eds.), *Higher Education Transitions: Theory and Research*. (3-12). Routledge.

岡田：なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

- 大谷尚 (2020)「高大接続改革の問題と今後必要な研究に関する試論ーポスト高大接続改革を見据え「高大接続型学力」の特質とその形成過程・形成環境を解明する質的研究の必要性ー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要』6, 65-76.
- 大多和直樹 (2019)「大学生（学生）研究と高校生（生徒）研究の〈溝〉：〈溝〉を超える新しい大学生研究に向けて」『教育社会学研究』104, 105-124.
- Quinn, J. (2010). Rethinking 'failed transitions' to higher education. In K. Ecclestone, G. Biesta, & M. Hughes (Eds.), *Transitions and learning through the lifecourse* (118-129). Routledge.
- 佐々木隆生 (2012)『大学入試の終焉ー高大接続テストによる再生』北海道大学出版会.
- 新立慶 (2010)「大学生の「生徒化」論における批判的考察」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻編著『教育論叢』53, 67-75.
- 杉谷祐美子 (2004)「大学教育の接続ーその現状と課題ー」『大学教育学会誌』26(2), 16-22.
- 竹田青嗣 (1989)『現象学入門』NHK 出版.
- 竹田青嗣 (2015)「人文科学の本質学的展開」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』新曜社, 1-60.
- 武内清 (2014)『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社.
- 田中孝平 (2022)「高校・大学間における教育接続タイプの特徴」『大学教育学会誌』44(1), 150-159.
- Tinto, V. (1987). *Leaving college: Rethinking the causes and cures of student attrition*. University of Chicago Press.
- Trow, M. (1973). *Problems in the transition from elite to mass higher education*. Carnegie Commission on Higher Education.
- Van Manen, M. (1990). *Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy*. State University of New York Press.
- 山田礼子 (2008)「初年次教育の歴史と理論」日本学生支援機構編著『大学と学生』新聞ダイジェスト社, 16-23.
- 山田礼子 (2011)「大学からみた高校との接続ー教育接続の課題ー」『高等教育研究』14, 23-45.
- 山本以和子・花堂奈緒子・林寛子・當山明華・陣内未来 (2024)「高大接続改革に係る入学前教育の実施状況と課題」『大学入試研究ジャーナル』34, 182-189.
- 山村滋・濱中淳子 (2019)「なぜ、「高校生の学習行動」なのか」山村滋・濱中淳子・立脇洋介編著『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか』ミネルヴァ書房, 1-16.
- 山竹伸二 (2015)「質的研究における現象学の可能性」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』新曜社, 61-118.
- 吉田文 (2008)「大学生研究の位相」『高等教育研究』11, 127-142.
- 吉田文 (2011)「大学と高校の接続の動向と課題」『高等教育研究』14, 169-181.
- 吉田文 (2020)「大学「教育」は改善したのか」『教育学研究』87(2), 178-189.

(高等教育学コース 博士後期課程2回生)

(受稿 2024 年 9 月 2 日、改稿 2024 年 11 月 18 日、受理 2024 年 12 月 19 日)

なぜ当事者視点で高校と大学の関係性を描くことが必要なのか？

岡田 航平

過去 30 年の高大接続の議論・政策に鑑みれば、現在、制度的には高大接続が間断なく可能になった。その上で本論文では、高校と大学の関係性をめぐる議論への新たな視点の提示を試みた。具体的には、高校と大学の関係性に関する先行研究や欧米における高等教育への移行研究の変遷を概観し「高校から大学への移行に際して困難を伴う学生の存在」及び「異質性を前提とした高校と大学の関係性」に批判的な視座を持つべきという示唆を得た。その上で、本論文では当事者の視点がもたらす必要性、及び、その視点への理解を促す学術的スタンスとしての現象学的重要性を示した。具体的には、研究者自身が内面を開示しながら、高校生・大学生の当事者視点を理解し、彼らの経験の意味・意義に迫り、本質観取を行う手法とその問いを例示した。この手法を用いて、「高校と大学の関係性」を帰納的かつ批判的に検討することが、本稿の議論を踏まえた筆者の次のステップとなる。

Necessity of Describing Relations between High School and University from the Perspective of Students

OKADA Kohei

Based on discussions and policies over the past 30 years, it is now systematically possible to smoothly connect high school and university. This paper presents a new perspective to discuss the relationship between high school and university. Specifically, through a review of previous research regarding to the relationship between high school and university in Japan and transition into higher education in an international context, it was suggested that a critical perspective should be taken on “the existence of students with difficulties when transitioning from high school to university” and “the relationship between high school and university based on heterogeneity”. The necessity of the perspective of the people involved (students) and the importance of phenomenology as an academic stance that promotes understanding of that perspective were also demonstrated. Specifically, the method and questions for approaching the meaning and significance of their lived experiences and attempting to grasp their essential nature were illustrated, by having the researchers themselves disclose their inner thoughts and understanding the students’ perspectives. The next step is to use this method to critically and inductively consider the relationship between high school and university.

キーワード：高校と大学の関係性、高大接続、高等教育への移行、当事者視点、現象学、生きられた経験

Keywords: Relationship between high school and university, High School to University Articulation, Transition into higher education, Perspective of the people involved (students), Phenomenology, Lived experience